鹿の子遺跡（かこ）

縄文時代の「落とし穴」

石岡市鹿の子

石岡市教育委員会　谷仲俊雄

遺跡の概要

鹿の子遺跡は，茨城県石岡市鹿の子から若松にかけて所在する遺跡です（図１）。昭和 54 年から 57 年にかけての常磐自動車建設に伴う発掘調査（鹿の子 C 遺跡）では，大量の漆紙文書の出土したことから「地下の正倉院」と呼ばれ，延暦年間（782～806 年）の蝦夷戦争に伴う武器等の生産工房と評価されています。

鹿の子遺跡における調査は，その後も住宅や店舗，学校建設等の開発に伴い継続して行われ，奈良・平安時代を中心に多くの遺構が発見されています。平成 23 年度に実施した第 30 次・第 38 次調査では，縄文時代の狩猟用の「落とし穴」（図２）を発掘しました。

遺構の概要

第 30 次・第 38 次調査は，個人住宅建設に伴い，住宅建設部分を対象に，石岡市教育委員会が実施しました。

第 30 次調査は，平成 23 年 9 月に実施しました。調査面積は 76 ㎡で，平安時代の竪穴建物跡 2 棟（SI01，SI02），縄文時代の落とし穴 1 基（SK02）などを検出しました（図３）。

第 38 次調査は，第 30 次調査地点の西側隣接地で，平成 24 年 1 月に実施しました。調査面積は 90 ㎡で，平安時代の竪穴建物跡２棟（SI01，SI02），縄文時代の落とし穴 2 基（SK04，SK05）などのほか，縄文時代の炉穴（SK08）と考えられる跡も検出しています（図４）。

縄文時代の落とし穴は，長軸 1.6～1.9m，短軸 0.95～1.15m の楕円形です。深さは 1～1.7m で，底にいくほど穴の幅が極端に狭くなっており，落ちた獲物が動けないように工夫がされています。遺物は出土していないため詳細な時期はわかりませんが，同様の形のものは，縄文時代前期後半から中期後半にかけてみられます（今村 1994，佐藤 2000，中村 2007）。

遺跡の評価

常磐自動車道建設に伴う発掘調査（鹿の子 C 遺跡）でも「縄文時代の陥し穴状遺構」が確認されています（図２左，茨城県教育財団 1883）。また，「縄文時代の遺物（主として前期）も出土し，竪穴住居跡とみられる遺構の存在も確認している」ようですが，調査期間等の関係で奈良・平安時代以外の遺構についてはほとんど調査を行うことができなかったようです（川井 1995）。

落とし穴を検出した第 30 次・第 38 次調査地点やその周辺は，南東に谷地形があるものの，標高 25m 前後のほぼ平坦地となっています。しかし，周辺の試掘調査の成果によれば，西側は浅い凹地（埋没谷）となっています。特に，第 38 次調査地点では北西から南東へと入り込んでおり，落とし穴は浅い凹地（埋没谷）の縁辺部および谷頭に位置していることになります（図５）。

落とし穴の配置は，規則的なものではないことから，追い込み猟に使用したものとは考えにくいものです。凹地周辺に位置していることから，豪雨などによって凹地に溜った水を求めて参集するイノシシやシカなどの獣のとおり道（ケモノ道）に仕掛けたものと想定できます（大成エンジニアリング 2013）。

試みに落とし穴の長軸と直交する線を引き，水場のある凹地の方向へ矢印を引くと，水場へと参集する「ケモノ道」の様子と，さらにはそれを狙った縄文人の「作戦」が浮かび上がってきます。

開発に伴う調査は，限られた調査面積となりますが，それらをつなぎ合わせていくことで，豊かで具体的な歴史を復元していくことができます。

文献

茨城県教育財団 1983『鹿の子 C 遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 20 集

今村啓爾 1994「陥穴」『縄文文化の研究２　生業』雄山閣

川井正一 1995「鹿の子 C 遺跡―蝦夷征討のための武器工場―」『石岡市の遺跡―歴史の里の発掘 100 年史―』石岡市教育委員会

佐藤宏之 2000『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター

大成エンジニアリング編 2013『武蔵国府関連遺跡調査報告―「プレミアムレジデンス府中西府駅前」新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―』三信住建株式会社

中村信博 2007「関東地方の陥し穴猟」『縄文時代の考古学５　なりわい―食料生産の技術―』同成社

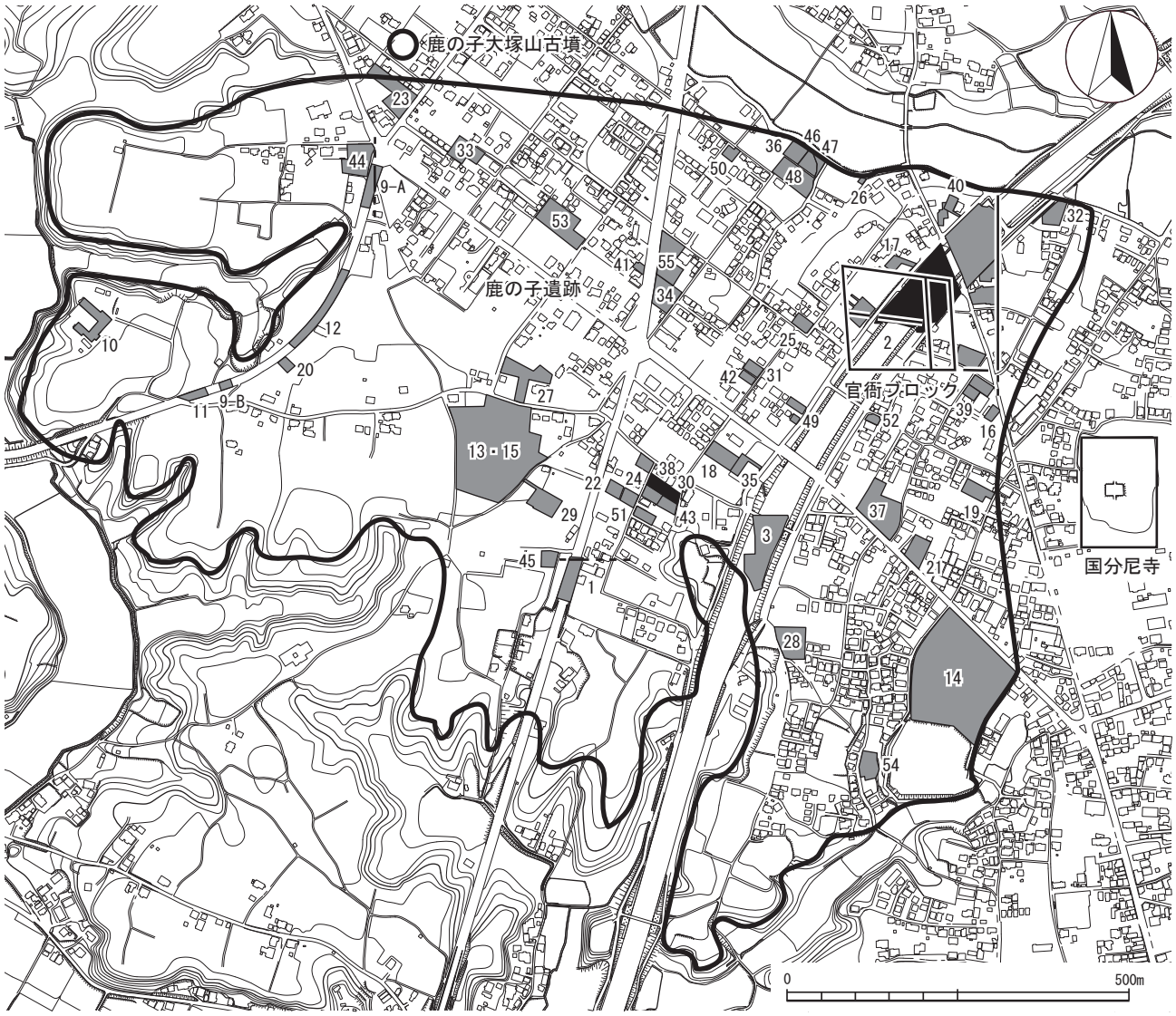

図１　鹿の子遺跡　全体図（S=1/10,000）　※黒塗りは落とし穴検出地点

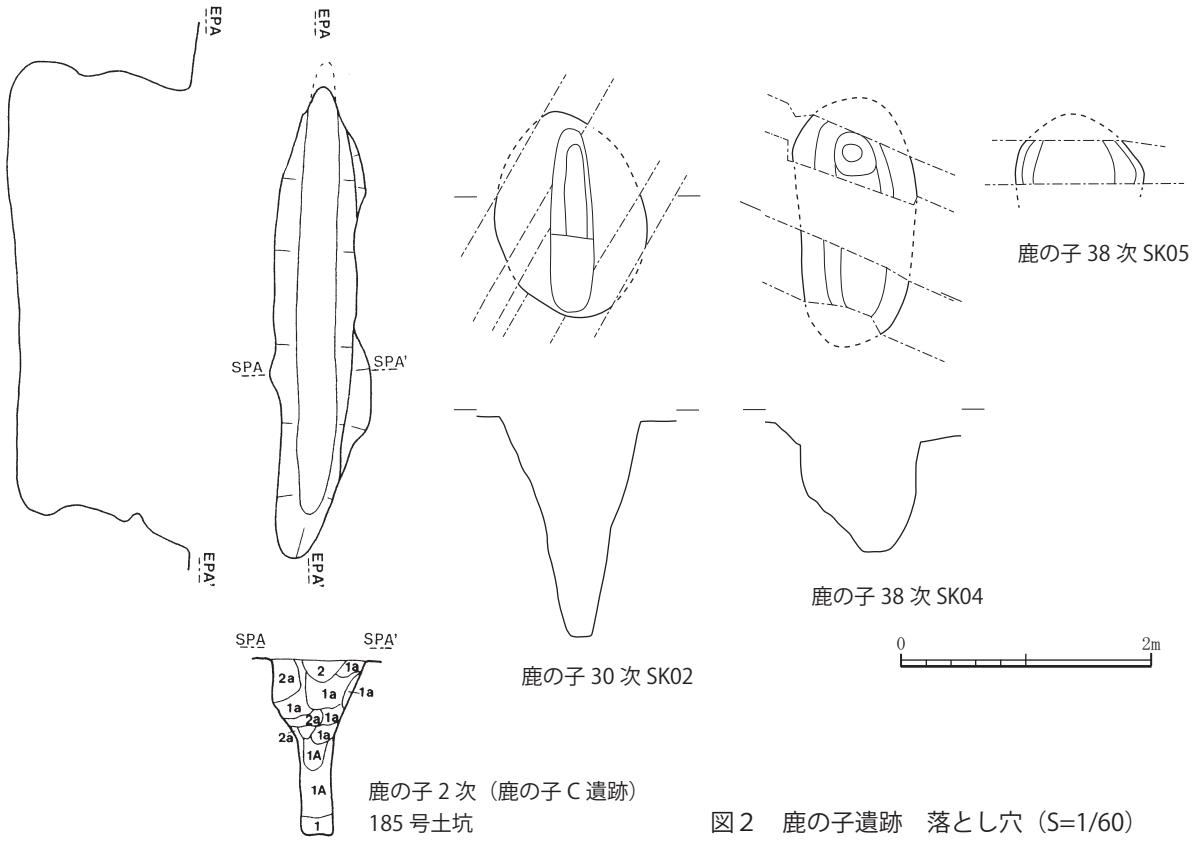

図２　鹿の子遺跡　落とし穴（S=1/60）

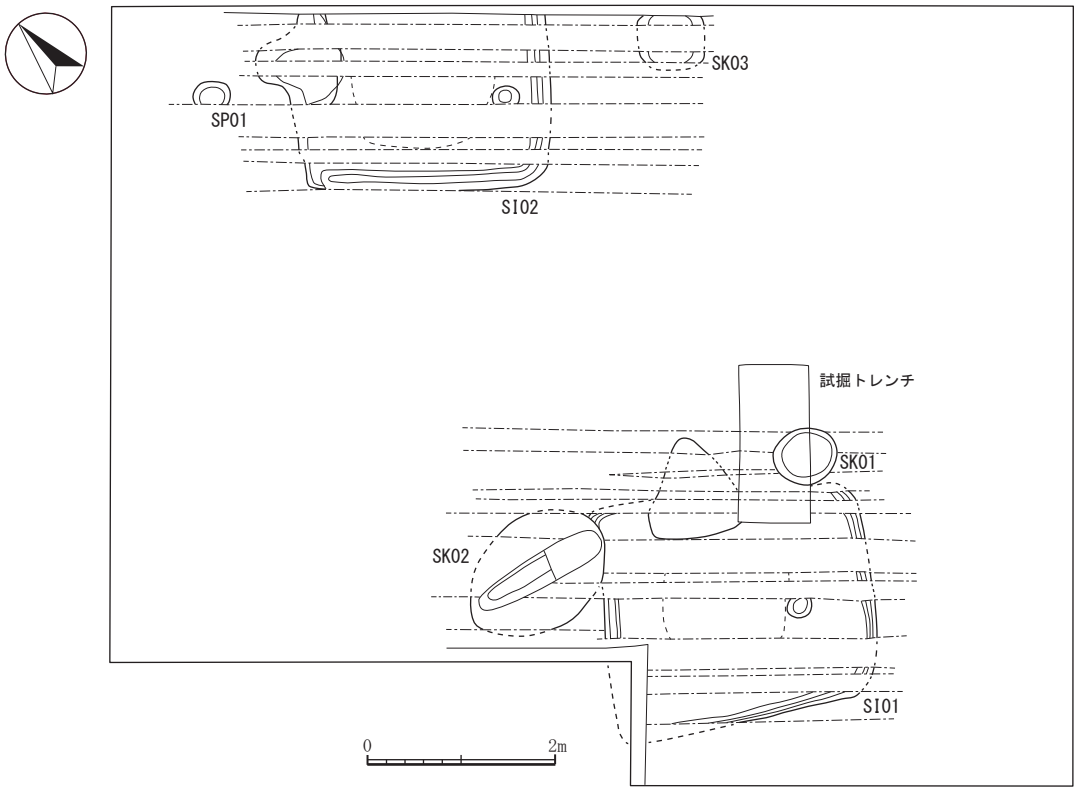

図３　鹿の子遺跡　第 30 次調査地点（S=1/80）

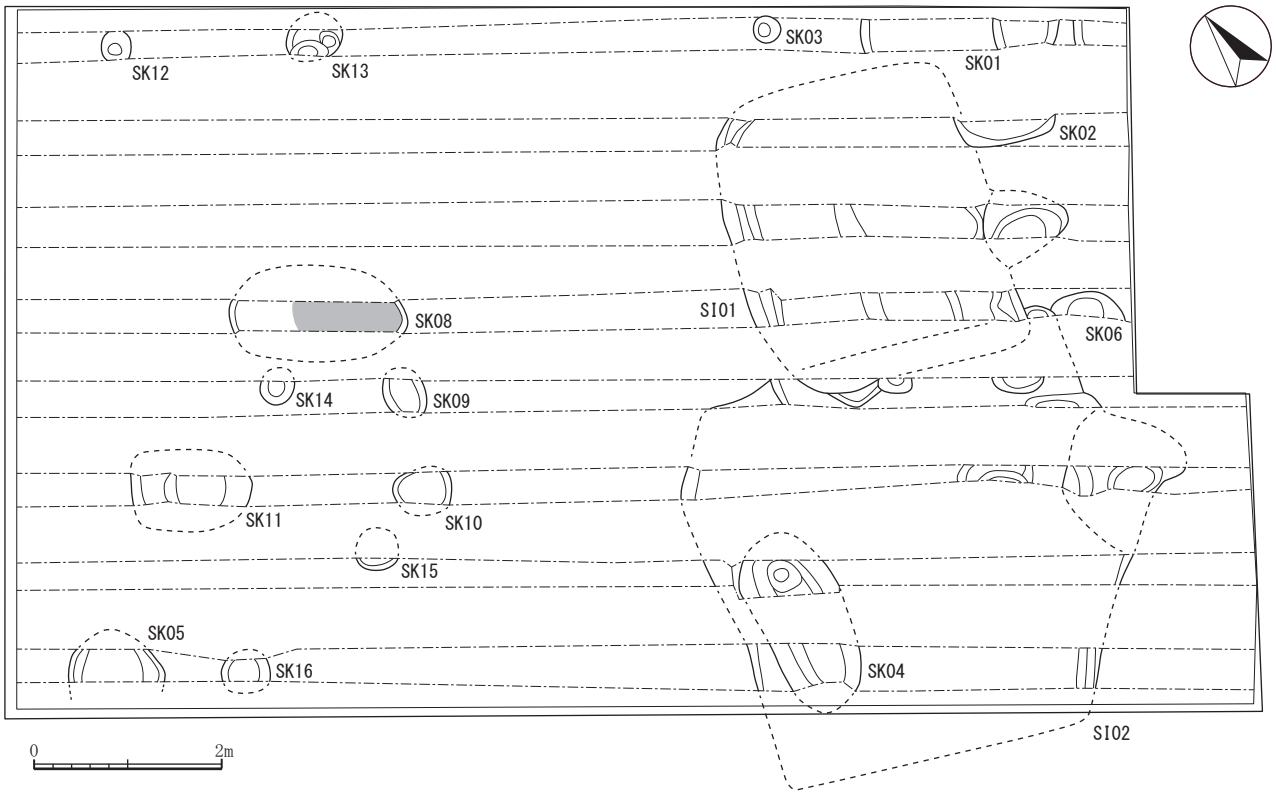

図４　鹿の子遺跡　第 38 次調査地点　全体図（S=1/80）

図５　鹿の子遺跡　落とし穴の分布（S=1/500）